

シマエナガは乱暴者だが愛される おみくじ好評、「聖地」になった帯廣神社

6/25(火) 16:59 配信 3 〇 〇 〇

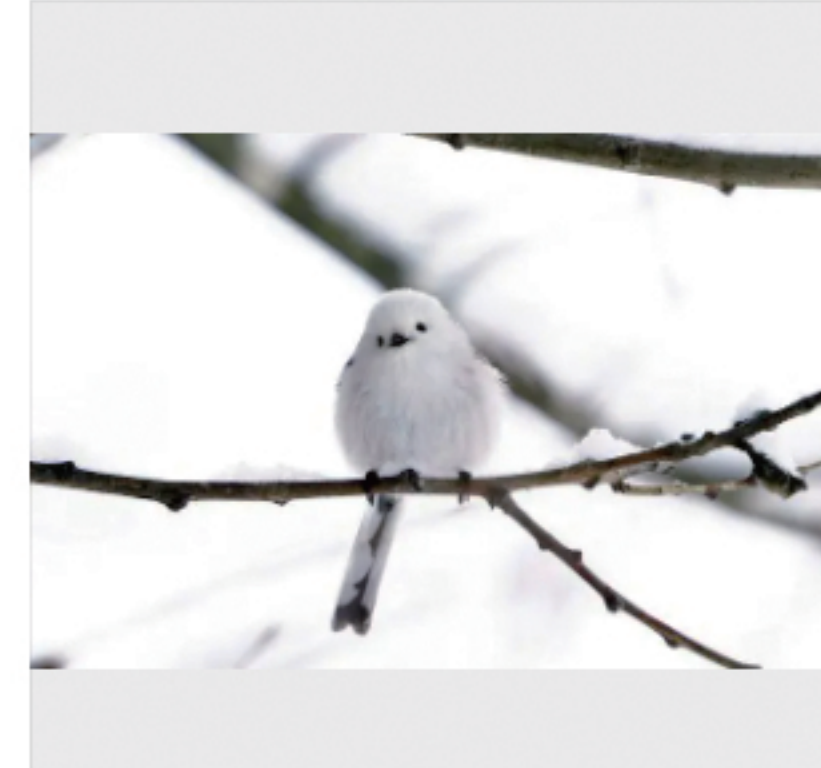
十勝毎日新聞 電子版
Tokachi Mainichi News Web

【北海道帯広市】「#シマエナガの聖地」－。冬になると帯廣神社のInstagramアカウントには、このハッシュタグが付いた写真の投稿が並ぶ。純白で丸く愛らしい姿で「雪の妖精」とも呼ばれるシマエナガ。今や人気は全国区となっている。



帯廣神社の「シマエナガみくじ」

【動画】シマエナガの聖地・帯廣神社



帯廣神社に訪れたシマエナガ（大野宮司提供）

その帯廣神社に、手のひらにちよこんと乗る大きさの、陶器のシマエナガがいる。少しキリッとした目つきが印象的。くちばしや目の周り、尻尾の長さにもこだわっている。2018年11月に登場した「シマエナガみくじ」（初穂料500円）だ。

宮司自ら紙粘土で成形

このおみくじ、「完成まで2年かかった」と大野清徳宮司。製作は全国各地の神社のおみくじに使われる干支（えと）や七福神などの陶器を製造する、「瀬戸焼」で有名な愛知県瀬戸市のセラドリーム（市川正社長）に依頼。北海道だけの鳥のため、ぬいぐるみや写真を先に送って特徴を伝えていたが、試作品第一号はまるでハト。「形や表情の絵付けが、これではだめだ」



シマエナガとの出会いなどについて語る大野宮司

市川社長も自らシマエナガのぬいぐるみや小物を独自に買い集め、「白いスズメみたいでかわいい」という印象だった。だが大野宮司は観察を続ける中で、この鳥が「実は乱暴者」と知り、性格を表情に反映させたいと思っていた。自ら紙粘土で成形し、会社に何度も来て調整を重ねる真剣な姿に「宮司の強いこだわりを感じた」。同社として一商品の開発に2年掛けるのは長い方で「特に顔の絵付けには苦労した」という。

帯廣神社のシマエナガみくじなど7種類の授与品は、全国のメディアに取り上げられる。道内各地に生息する鳥だが、帯廣神社が特別視される要因は「聖地化」の成功だ。

鳥の専門家が太鼓判



「かわいい」と複数求める人も多い「シマエナガみくじ」

バードウォッチング専門誌「BIRDER（バーダー）」（文一総合出版）は2022年12月にシマエナガブームを特集。探鳥地の一つとして帯広市を紹介した。編集に携わった同社の高野丈さんは、20年ほど前に妻の実家がある市内に帰省した際、同神社の境内で初めてこの鳥を撮影したという。高野さんは23年1月のnoteで「わたしがシマエナガの聖地を挙げるなら、エナガ本でも紹介した帯廣神社だ」とつぶった。

月5000個製作

宮司の観察日記など積み上げてきた「実績」に加わった専門家のお墨付き。それからは御朱印や絵馬にも人気が集まり「#シマエナガ神社」として定着。おみくじは年を追うごとに製造数が増えている。ずらりと一列に並ぶ「シマエナガ団子」のために2個3個と集めて飾る人もおり、現在は月3000～5000個ペースで製作。色違いのない一つのパターンでこの数は「他の品と比べ多い方。ブームについていくのが大変」（市川社長）と笑う。

きっかけは魅力探し

今や帯廣神社にとってシンボリックな存在とも言えるシマエナガ。この鳥と大野宮司との“出会い”のきっかけは、「帯廣神社の魅力探し」だった。



「シマエナガの聖地」として有名な帯廣神社

帯廣神社が地域や住む人々にとって必要な存在とってもらうためには、神社に足を運んでもらう必要がある。そのためには「ここにしかない」「行きたくなる」魅力をPRしたい。でも一体どうすれば－。そんな中、大野宮司は、広島県杉森神社が、七十二候（しちじゅうにこう）を写真と文章でまとめた本を見つけた。

七十二候の十勝版に挑戦

七十二候とは、「大寒」や「春分」などの二十四節気をさらに約5日ずつ分けたもので、本にはそれぞれに「桜始開（さくらはじめてひらく）」「温風至（あつかげいたる）」など、その時期の季節感を表す名称が付いていた。だが本州ベースで気候や取れる作物、旬の食べ物を表現しており、十勝の感覚とはほど遠い。そこで「帯廣神社の鎮守の杜（もり）の自然を観察し、自分で十勝版をつくってみよう」と思い立つ。



大野宮司が作った帯廣神社七十二候

2016年ごろから境内の観察を始め、梅の花が咲いたり、雪化粧が始まったりするたびに自ら写真を撮り、この写真に俳句や短歌を合わせ、1年間ほどフェイスブック（FB）で発信した。その中の「秋分次候（およそ9月28日～）」が「島栂長鳴（しまえながなく）」。撮影に当たって1年間、図鑑やインターネットで帯広や北海道の花や生き物、気象を調べた大野宮司。その中で「（ブームになる前だったが）この鳥の存在は知っていた。境内にもいるのかなと思ったら、いた」。帯廣神社にとって、この純白で丸く愛らしい姿の鳥の記念すべき初投稿となった。

野鳥や花木への関心を深めた一方で、七十二候とは別にシマエナガの観察記録もフェイスブックでスタート。自分なりに編み出した探し方や巣作りから子育てを写真ですべて記録し、発信している。カメラのシャッターを切るたびに「心を射抜かれるかわいさがある。ポーズとその姿を観察できるのは特権ですよ」と目を細めた。

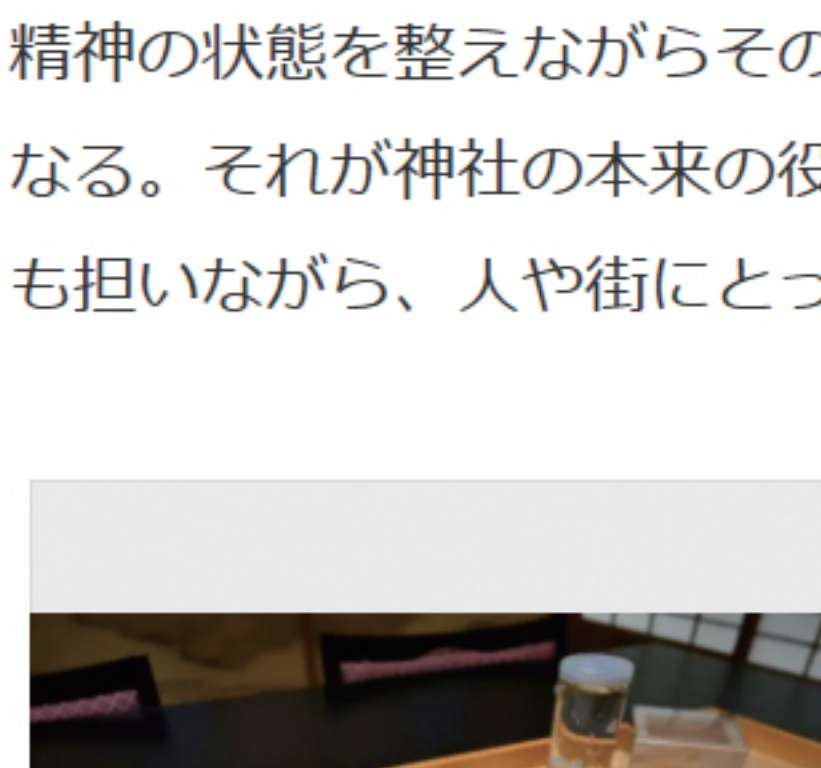
地域に必要な存在に

一連の取り組みは今、バードウォッチングをしながら境内を歩くことで、日光を浴びたり、水音や木の葉が揺れる音に耳を傾けたりしながら幸福感が得られるという「お散歩参り」の推奨や、境内にある「緑の池」や花手水（ちようず）など神社の自然と「映え」を生かした情報発信に生かされ、帯廣神社の知名度アップにつながっている。



インスタ映えすると人気の「緑の池」

大野宮司は「神社が行きたくなる存在になれば、健康や精神の状態を整えながらその先にある夢を願うステップになる。それが神社の本来の役割」とし、「地域観光の一翼も担いながら、人や街にとって必要な存在でありたい」と力を込めた。



帯廣神社にあるシマエナガにまつわる授与品の数々

「己の立てるところを深く掘れ。そこには必ず泉あらん」とは明治時代の思想家・高山樗牛の言葉だが、幼い頃から当たり前にあった周囲の自然環境を丹念に調べて七十二候をつくり上げたことで、大野宮司はシマエナガを見つけることができた。宮司にとってシマエナガとは、との問いかげに「一つのターニングポイントだった。物の見方、自然の大切さを学んだ」と語った。（細谷敦生、植木康則）

<シマエナガ>

北海道に生息している野鳥で、本州にいるエナガの亜種。体長は14センチほどだが、その半分近くは「柄」と言われる長い尾羽。夏の羽毛は茶色いが冬になると白くなり、身体を温めるために空気を含んで丸みを帯びる。その愛くるしい姿が人気となり、今では写真集やぬいぐるみなどのグッズが売られ、テレビでも特集されている。